

ヤマト福祉財団 NEWS

ヤマトグループ賛助会員向けニュース(季刊)

発行部数12万部・非売品

YAMATO WELFARE FOUNDATION

No.37

1月20日発行 2013 Winter

[第13回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞]
こまやかな心遣いと
揺るがぬ信念で
雇用の種をまき、
花を咲かせました



写真前列左より受賞された堀込氏ご夫妻、堀込真理子さん、楠元洋子さん、楠元氏ご令嬢

後列左より森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、有富慶二ヤマト福祉財団理事長、山内雅喜ヤマト運輸株式会社代表取締役社長

東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金
助成先を訪ねて

助成事業が
地域復興の起爆剤と
なることを願って p07



私たちの賛助会費が活かされています

■障がい者福祉助成金 助成先レポートVol16 (日野市)

共に働き、共に生きるまち。
その実現へつぎつぎと戦略を打つ p18

この街で一緒に生きていく
障がい者のクロネコメール便配達

わからないこと、できないことが、成長のカギでした。 p20

第13回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 贈呈式

こまやかな心遣いと揺るがぬ信念で
雇用の種をまき、花を咲かせました

2012年12月4日／東京・日本工業倶楽部



優れた発想力と実行力で、8年間に20カ所の事業所を開設した楠元洋子さん



「思い立ったら即行動。天性のビジネスセンスで大きな商談も30分でまとめてしまう。片手に温かい思いやり、もう一方の手に算盤を握っている(笑)」と、楠本さんを評する推薦人の社会福祉法人清樹会 プライツハウス住吉の岩下博子さん



選考委員を代表して、「優秀な候補者が多数あり、選考はむずかしい作業でしたが、最終的には全員一致でお二人に決まりました」と語る渡辺修 財団法人厚生年金事業振興団 理事長

障がい者の経済的自立に、雇用の拡大に、多大な貢献をされた功労者を讃えるべく、今年も小倉昌男賞贈呈式に大勢の人々が駆けつけてくださいました。

受賞したのは、宮崎県の社会福祉法人「キャンパスの会」理事長の楠元洋子さんと、社会福祉法人「東京コロン」IT事業本部トータル情報処理センター 職能開発室所長を務める堀込真理子さんのご両名です。

重度障がいのご息女を持つ楠元さんは、「学校卒業後に障がい者が地域で働くことのできる場」づくりの必要性を感じ、自ら本格的に活動されるようになってわずか8年半。しかし、優れた発想力と類い稀なる実行力を発揮し、リネンサービス事業と給食・弁当配食事業で、125名の利用者にA型平均給料6万円超、B型平均給料およそ1万5000円という賞賛すべき実績を上げています。

いっぽう堀込さんは、コンピュータメーカーや外資系ソフトウェア企業勤務を経て、時ちようビエンターネット普及の黎明期に、福祉の世界に飛び込みました。背中を押したのは「情報処理技術の持つ可能性をもっとも必要としている人たちこそ、障がいのある方たちだ」という確信です。以来、障がい者へのIT教育を実践。さらには職業紹介事業者の認可も取得し、多くの修了生にITを活用した在宅就労の道を提供しています。



冒頭、あいさつに立った有富慶二理事長は、「地域社会への貢献」と「障がい者支援」がヤマトグループの企業理念の内にはっきりと明記されていることに触れ、「小倉昌男賞は、当財団の存在意義を宣言するフラッグシップのようなものです。今年もまた、ずば抜けて素晴らしい方に賞を差し上げることができ喜んでいきます」とお祝いを述べるとともに、続けて受賞のお二人をこう讃えました。

「楠元さんの驚嘆すべき点の一つはスピードです。社会福祉法人の立場でビジネスを行おうとする、煩雑な手続きが必要です。そこで楠元さんは別に会社を興して、そこが借金をして施設をつくり、それを社会福祉法人が借りて運営するという方法を探りました。その結果、事業展開のスピードを大幅に上げることができたわけですね。(できない理由)を並べられるのではなく、常にどうしたらできるのかだけを考えていらっしやるのでしょ」

そして、堀込さんについては、



堀込さんの活動が国際的にも高く評価されていることを紹介。さらに今回の受賞を「在宅ワーカーを支援する人たちやその事業の意義を広く知っていただける良い機会」と祝う、推薦人の法政大学名誉教授の松井亮輔さん



ご祝辞をいただいた厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長



パソコンを使い、重度障がい者の働く場を開拓した堀込真理子さん



贈呈式でした。

企業に雇用されるスタイル以外にも、ことさら障がい重いなどの理由で「雇用」ではない働き方を希望する方のために、一般企業から一括で受けた業務を細分化して割り振り、遂行するチーム組織を2000年に立ち上げた点についても紹介し、「これは運送会社でいうところの〈混載〉です。通常の雇用は、社員それぞれ能力を占有する〈貸切〉と言っているように。この〈混載〉の仕組みをつくったところが素晴らしいの一言です」と惜しみない賛辞を送りました。

賞状ならびに正賞として、母子のブロンズ像「愛」が手渡された後、これも恒例となった花田春兆さんのお祝いの俳句も披露されると、会場は一気に和やかなムードに包まれました。

お二人の爽やかな笑顔からは、勇気ある実践の大切さ、尊さが強く伝わってくる、そんな印象深い



楠元洋子さんへ贈られた俳句
輝とおむつ
親子を越えし

人の輪よ
花田春兆

ミヤコソジヨウ 鹿児島育ちの祖母から聞きなれた地名。そう、同じ島津藩で親しみがあつたのだろう。もちろん霧島の雄大な山谷もイメージされていたに違いない。桜島と並ぶお国自慢だったであろうから。

そんな縁でも親近感も沸いたが、それ以上に、生涯を貫く生き方の前向きな勢いの良さに惹きつけられる、何とも魅力的な方だ。

輝(ヒジ) 今の「時世からは遠い存在になつていようが、電気釜も、洗濯機も無かつた頃、炊事や洗濯に携わる人々の冬場の苦労を示す、手の荒れを指していたのだ。古語？にやりかしているのを活用したのも、おむつ・親子・人の輪と盛り込んでも、一杯の古めかしさも、長い歳月を奮闘し続けてきたこの人に、相応しそつに思える。それにしても、失礼な言い方だけれど、最新の洗濯機よりも、素早く鮮やかな、心身面の回転の見事さに、圧倒されるばかりだ。

壮年期以後の私の、存在のすべてとも言いたい障がい関連の執筆活動。そのすべてを担ってくれているのが、ベッドサイドのパソコン。

そのパソコンに私を結び付けてくれたのが、俗にパソ・ボラと呼ばれている組織の人だからこの人々が居なかつたら、当然、現在の私は、存在が危ぶまれる。堀込さんは組織の草分け。

しかも脳性まひに重点を置かれている。その上、本格的な活動を開始された時期が、私がワープロからパソコンに切り換えた時期と、見事に前後している。こう重なるのは、直接・間接を問わず、お世話になつてきたのは確かだから、紛れも無い恩人のお一人だ。

恩など強い詞が浮かんだのは、現在それを痛感させられて居るからだ。パソコンがトラブって、我がIT基地が、絶対的危機に曝されたからだ。幸い代替品の貸与に救われたが、容易には埋まらない仕事の遅れは残っている。終りの「めや」は、られない・てはならない、の意を強調する単語を借用したもの。

堀込真理子さんへ贈られた俳句
励む師走
パソコンの恩

忘れめや
花田春兆



紙オムツ販売が原点

重度障がい者への気配りをきつかけに
障がい者の働く場を作り上げた楠元さんを訪ねました

社会福祉法人キャンパスの会
理事長 楠元 洋子さん



昨年開設した「お弁当のまるよし」でも衛生管理を徹底。職場に広がる緊張感に、福祉として甘える余地はありません。

重度障がい者の受け入れを願って

大阪府豊中市で暮らしてきた楠元さんが、重度障がい者の娘と生まれ故郷の都城市に戻ったのは10年前。同郷であった夫の母親の介護をするためでした。重度障がい者の受け入れで豊中市より大きく遅れていることを実感した楠元さんは、保護者会を結成。紙オムツの販売で得た利益を周辺の施設の設備改善のために寄付する活動をはじめました。やがて、「自分たちで施設づくりを行うほうが早い。」との考えに至り、出来た資金を元にNPO法人「キャンパスの会」を設立して、学童保育・居宅介護・レスパイトサービスを行う「くれよんはうす」を開設しました。

他の障がいにも門戸を広げて

そして、保護者会のつながりから重度障がい者に加えて知的障がい、精神障がいの方々を受け入れるようになりました。当初からの保護者の中には重度障がい者へのサービス低下を心配する声もありましたが、移動やトイレ介助など人手が必要となる場面でむしろ手厚くなるのが分かり、知的障がい

い者デイサービスや小規模作業所の開設へと事業展開が加速していくことになりました。

重度障がい者へのサービスがきつかけで

施設では重度障がい者のための給食として、毎日「きざみ食」を提供していました。美味しいものしか口にしない重度障がいの利用者のために調理した日替わりメニュー。これを障がい者の働く場で作る、周辺で配達販売できるのではないかとお弁当として試食アンケートを開始しました。試食から半年後、「給食センター」として一日に300食を提供する規模になり、キャンパスの会の中核事業となっていきました。

一方、障がい者の働く場として「紙おむつ専門店キャンパス」を開店。紙オムツの卸元より都城周辺の病院や産院で使う産着、新生児用オムツカバー、布オムツなどのリネンサービスを紹介され、リネンサービスも事業化に乗り出します。

母親の気配りが売り上げを伸ばす

楠元さんは、障がい者雇用の相談を受けた牛乳工場を見学。目に

飛び込んできたのは工場の従業員に着用している作業着でした。「見積もりを出させてください。」とすぐに申し出て商談を成立させます。また、宮崎牛を提供するステークレストランでは、食事をすすむときの布エプロンを厚手のオリジナルデザインで提案し、店舗のコストダウンとグレードアップに貢献。そして、なによりも優良なお取引先により施設の信用を獲得しました。

お弁当も安くておいしいと評判になり、会社、事業所の社員・職員の昼食として広がって、一日1300食の配食を手掛ける規模となりました。8年あまりで20カ所以上の事業所を開設してきた楠元さんですが、重度障がい者の介護、リネンの縫製やデザインそしてお弁当の味付けも重度障がい者の母親としての経験がしっかりと生きています。

DATA

〒885-0082 宮崎県都城市南鷹尾町13-2
TEL: 0986-51-5132 FAX: 0986-26-5735

〈10年の実績〉

平成13年	8月	義母の介護のため宮崎県都城市に娘と戻る
同	11月	保護者会を結成し、紙おむつの委託給付事業をボランティアで開始。利益を施設に寄付。
平成16年	5月	NPO法人キャンパスの会 設立。
平成17年	8月	学童保育・居宅介護・レスパイトサービス「くれよんはうす」開設
平成17年	4月	身体障がい者デイサービス「ばすてるはうす」開設
	9月	「くれよんくらぶ」開設
	10月	障がい者雇用の店「紙おむつ専門店キャンパス」開店
平成18年	2月	知的障がい者デイサービス「ぱれっとはうす」開所
	4月	小規模作業所「あとリエ」(同10月 就労移行支援事業所) 開所
	11月	障がい者と高齢者雇用の店「ふれあい野菜市」開店
平成19年	3月	共同生活事業所「姫城ホーム」開設
	6月	社会福祉法人キャンパスの会 設立
同		就労継続支援A・B型事業所「給食センターキャンパス」開設
	9月	就労継続支援A型事業所「CBSリネンサービス」開設
平成21年	4月	「みやこのじょう就業・生活支援センター」開設
	11月	共同生活事業所「久保原西ホーム」開設
	12月	就労継続支援A・B型「CBSリネンサービス都北事業所」開設
平成22年	3月	共同生活事業所「久保原東ホーム」開設
	5月	相談支援事業所・居宅介護支援事業所「キャンパス」開設
	10月	共同生活事業所「久保原南ホーム」開設
平成23年	8月	短期入所事業所「さくら」開設
	11月	地域活動支援センターⅡ型「なみき」開設
	12月	就労継続支援A型・B型事業所「お弁当のまるよし」開設
平成24年	3月	共同生活事業所「広原ホーム」開設
	11月	株式会社「丸佳」食品加工場 開設

※ ICTによる在宅雇用・就労支援

パソコンを使い頸椎損傷などの重度の障がい者の就労の道を拓いた堀込さんを訪ねました



「東京コロニーが長年取り組んできたことが認められてうれしい」と堀込さん

社会福祉法人東京コロニー
IT事業本部トータル情報処理センター
能力開発室所長 堀込真理子さん

障がいのある人にこそITを

かつて堀込さんは、外資系IT企業でお客様の管理者などに電話で回答する部署の管理者として活躍していました。そこに障がいのある方から問い合わせの電話が入ります。オペレータの対応を割り込んで聞いていると、最初はひとつひとつの操作に随分時間がかかっているなと思いました。ところがその顧客が作成するグラフは、大手企業の重要な情報だったので、「どんなに偉い人が作成しても、障がいのある方が作成しても、でき上がる情報の重要性は同じ。障がいのある方へのサポートは大変ですが、ITが一番役に立つのは

こういう人たちなのではないか。彼らを専門にサポートできたら、凄いいことになるのではないだろうか」と考えるようになりました。

当時、唯一、障がいのある方に専門のサポートを行っているIT企業に転職を希望しましたが、そこに席はありませんでした。「ならば企業ではなく、福祉に入って、障

がいのある方により効果的なコンピュータの活用方法をサポートしよう」と発想を転換します。堀込さんは、会社を辞めて日本社会事業大学で社会福祉士の資格を取得します。この時、いち早く「福祉でコンピュータ」に取り組んでいる東京コロニーを知り、入社を決めました。

東京コロニーではじめた挑戦

堀込さんが入社した95年は、IT業界にとってエポックメイキングな年です。Windows 95が発売され、インターネットも徐々に企業が導入しはじめました。堀込さんは、今後は外出が困難な重い障がいのある人にとって、パソコンと通信が自立の手段になる」と直感。「東京コロニーではすでにその頃、障がいのある方がコンピュータを学ぶ支援を行っていました。まだ在宅就労の実績はありませんでした。『障がいがある人も在宅雇用・就労につながるようにしていきたい』と上司に相談すると、『よし、なにができるかやってみなさい』とトライさせてくれたのです」。早速インターネットを使って、情報処理に必要なスキルや資格取得を在宅で修得できる

ようにしました。しかし、まだ雇用主と生徒たちを結びつけるという大きな課題が残されていたのです。

壁を取り払うことに夢を現実

「在宅雇用に結びつけるために、なにをすべきかを教えてくれたのは、ここで学ぶ生徒たちでした」と堀込さん。

生徒一人ひとりを見つめるうち、障がいの重い人の在宅雇用・就労を実現するには、生産性が高くかつ二次障がいを引き起こさない無理のない作業環境が必要だと気づきました。例えば、あごを使って操作する人がスムーズに動かせる方法、長時間使用しても負担のかからない方法を補装具製作会社と一緒に考えました。こうして各人の障がいに合わせ、パソコンを指

一本でも足でも音声でも操作できる道具の改善にひとつずつ取り組んでいきました。次に挑んだのが職域の開拓です。東京コロニーを支援するさまざまな企業の人事担当者や障がいのある人に合う仕事や職場環境について検討し、雇用を考えている多くの企業に新しい職域を提案していききました。その結果、以前の在宅雇用はプログラムやデータ入力を中心でしたが、動画を扱う仕事から総務、人事、秘書業務まで大きく職域を広げることが成功します。

例えば(株)TBSテレビでは、聴覚障がいもある重度身体障がい者を在宅モニターに採用。耳が聞

こえない立場でTVを見て気付く問題点をレポートし、番組の質の向上に役立っています。

他にも在宅就労を企業のメリット(雇用率のダブルカウントや事業所の環境調整が不要など)と考える事業者や人事担当者を障がいの自宅IT仕事場に招き、どういった環境で働いているのかを理解してもらおう努力も続けました。これにより、在宅就労者と会社に通勤し就労している社員を同等の条件で雇用するように意識を変えています。

こうして堀込さんは、いままでに延べ約1000人の在宅雇用・就労を実現しています。

在宅雇用で活躍する浮揚玲子さん

浮揚さんはかつて保育士として働いていましたが、関節リウマチの悪化で身体が不自由になり退職。外出もままならず、もう社会復帰は無理かと考えていた時、堀込さんと出会いました。「重度の頸椎損傷や筋ジストロフィー、脳性まひなど自分より障がいの重い方が東京コロニーで学び、就職できているのを知り、自分もやれるかもと前向きになりました」。現在は、NECソフト(株)の経営企画本部CSR推進部の在宅社員として、社員とともに活躍しています。



DATA

〒165-0023 東京都中野区江原町2-6-7
TEL: 03(3952)6166 FAX: 03(3952)6664

〈最近の実績〉

- IT講座受講修了者: 94名
- 在宅雇用: 47名
- 通勤就労: 11名
- ※IT受講修了者以外の在宅雇用: 23名、通勤就労: 2名
- 平均月収: 14万9千円
- 勤続10年以上: 22名
- 業務請負・起業者: 23名
- 就労者の障がいの内容は、頸椎損傷、脳性まひ、筋ジストロフィー、関節性リウマチなど重度障がい者が主となっている。



楠元洋子さん
社会福祉法人 キャンパスの会 理事長

宮崎県都城市生まれ。重度障がいの次女の養育に際し、紙おむつの共同購入や食品販売を通じ、大阪府豊中市で作業所設立の資金づくりに奔走。2001年に義母の介護により都城に。04年にNPO法人キャンパスの会設立。以降、福祉支援の事業所、障がい者雇用の店を次々と開設。07年、社会福祉法人を設立。09年には就労支援A・B型「CBSリネンサービス」を。11年には同「お弁当のまるよし」開設。12年には(株)丸佳食品加工工場がオープン。

受賞のことば

思い立ったら、
じつとなんかしていられない。
大事なものは、一歩踏み出す勇気

子どもが15歳のころ、当時は大阪に住んでいたのですが、紙おむつが大量に要るようになりました。これをなんとか安く購入する方法はないかと考え、養護学校のお母さん方と共同で大量購入することにしました。話はうまく進み、安価で購入できるようになりましたので、父母の会に諮りまして、その差益すべてを作業所建設に使いました。そんな形で私は自然とこの道に入ってきたのです。

義母の介護で都城に戻り、社会福祉法人を立ち上げたんですけれど、ここでは就労に専念をしました。「もしも自分に何かがあったら、子どもたちはどのようにして地域で生きていくのだろう?」という、障がいを持つ親の思いはみんな同じです。

NPOの設立も、この社会福祉法人

のときも補助金なしで立ち上げました。利用者さんは待つてはくれません。補助金を待つて1年、2年と先送りすれば、それだけ行き場を失う人が増えてしまいます。これまで返した借金は4億円!でも挑戦しないで後悔するより、たとえ失敗してもやっつたうえで後悔したい。大事なものは、一歩踏み出す勇気。「命までは取られないんだから」と思っています。

うちの情報は、求められればすべて明らかにしています。福祉家同士が互いに競うことは、利用者さんのプラスになると思うからです。そして教えた分だけ、さらにながらばらなきやと、いつもフアイトを湧かせています。



堀込真理子さん
社会福祉法人 東京コロニー
IT事業本部 トーココ情報処理センター 職能開発室 所長

広島県生まれ。パソコンメーカーに勤務し販売店教育を担当。転職後、外資系ソフトウェアメーカーでユーザーサポート業務に携わり、障がい者のパソコン利用の現状を知って自らの方向性を転換。1995年、日本社会事業大学研究科にて社会福祉士取得。同年より東京コロニーに勤務。翌年、初の在宅雇用を実現。2000年、請負型の在宅就労支援業務を開始。01年にはIT講座修了者累計50名超、在宅雇用累計33名を数え、現在に至る。

受賞のことば

在宅ワーカーは
都合のいい外注さんではなく
ともに同じゴールを目指す仲間です

ビジネスソフト会社のサポートセンター勤務の当時、障がいを持ち長期入院されているような方からもお問い合わせの電話がありました。それは10円玉の落ちる音で分かります。おそらく小銭をたくさん準備して、公衆電話からかけてこられたのです。しかし一度切れてしまうと、同じ担当者につながるとは限らず、また一からです…。10円玉の落ちる音を耳にするたびに、「こういう人たちに必要なサポートは、いま自分がしているものでは足りない!」それが今の私の原点です。

昨日、雇用率を上げるために在宅勤務が着目されるケースも目立ってきました。在宅勤務の方は障がいの重い人が多いですから、算定上2人分になりますし、事務所の改装工事や、職場の

社員への説明もあまりしなくてすむと

いった誤った考えがそこにはあります。しかし、自宅で面談をしてみたら、ほとんどの人事担当者は「うちの新人社員だ、責任を持たなくてはいけない」という顔つきに変わります。その人のそれまでの過酷な人生や、ご家族がこの日をどれほど待っていたのかを、実感されるからだと思います。

ここまで私たちが辿りつけたのは、在宅で働くという道に臆せず挑戦していった生徒さんたち、受け入れてくださったたくさんの方々の事業者さんらパイオニアのおかげです。本当に感謝します。今後は重度以外の多様な方に対象を広げていきたいと思っています。



野田村保育所

東日本大震災 生活・
産業基盤復興再生募金



助成先を訪ねて

助成事業が地域復興の 起爆剤となることを願って

震災から約1年10カ月、各地の助成事業は設備や施設など少しずつ目に見える形となってきています。昨年春に着工した野田村保育所も秋に完成し、子どもたちの笑顔が園舎に戻ってきました。昨年春に着工した野田村保育所も秋に完成し、子どもたちの笑顔が園舎に戻ってきました。本助成が地域復興の起爆剤となることを願い、これからも現地の声と姿をお伝えします。



社会福祉法人野田村保育会
[野田村保育所再建事業]
野田村



岩手県
[水産共同利用施設復旧支援事業]
田野畑村



岩手県
[製氷・貯水施設回復支援事業]
宮古市魚市場



釜石市漁業協同組合連合会
[魚市場経営基盤再生事業]
釜石市・新浜町魚市場



岩手県
[水産加工事業者生産回復支援事業]
釜石市



宮城県
[農業生産復旧緊急対策事業]
東松島市



宮城県
[養殖用資機材等緊急整備事業]
石巻市・牡鹿半島鮎川漁港



宮城県
[高鮮度水産物供給施設整備事業]
石巻市・牡鹿半島鮎川漁港



岩手県
[水産共同利用施設復旧支援事業]
釜石市・箱崎漁港



餅撒きも行われ、子どもたちと一緒に多くの村民も参加した上棟式

**奇跡の脱出と報道された
保育所が生まれ変わる日**

岩手県の北東部、北上山地の沿岸部に位置する野田村。昨年10月30日に行われた野田村保育所の竣

[野田村保育所再建事業]
(第2次助成) **社会福祉法人野田村保育会**

より内陸で高台に 完成した 新保育所の“竣工式”、 開所式を開催



開所式に子どもたちの歌声がひびきました

功式に伺った際は、途中目にする安家溪谷の山々を赤や黄色の紅葉が鮮やかに彩っている時期でした。野田村保育所は「園児全員が奇跡の脱出」とマスコミにも取り上げられました。当時、野田村保育所では、0〜6歳の子どもを91人も預かっていました。その日通所していた子どもは84人。全員が無事に脱出できたのは、月に一度きちんと防災訓練を行い、より安全な避難ルート、避難場所を繰り返し検討・改善してきた成果です。園児、職員ともに全員が無事だったので、湾岸から西にわずか500メートルの場所にあった保育所は、津波により建物は跡形もなく流されてしまい、現在はその門柱だけが残っています。

野田村では、急遽閉鎖していた旧新山保育所を開放しましたが、

この施設の定員は45人。震災後残った64人の子どものための保育を行うには狭過ぎます。復興に奔走する保護者のために、子供たちを安心して預けられる施設を一刻も早く再建しようと、安全な高台への移転を計画しました。しかしこれでは原形復旧が原則の国の補助を得られません。そこで野田村は、本助成に申請し、野田村保育所の再建事業を開始。昨年4月11日に地鎮祭を行い、9月9日には300人強の参加者が集まり、盛大に上棟式も開催しました。そして10月30日、念願の新しい野田村保育所



■新保育所の概要
○木造平屋建て ○建物:856.25㎡ ○敷地:5361.39㎡ ○園児:90人定員 ○職員:16人

新しい保育所が建築された場所は、津波の心配を払拭するため以前より1キロメートル内陸、17メートル以上の高台です。坂道を上っていくと、メルヘンチックな建物が見えてきます。施設の規模もスケールアップし、園児90人が伸び伸びと遊べるようになり、さらに太陽光照明や天窓などがすべての保育室に取り入れられ、明るく快適な保育空間に仕上がっています。

竣工式の前には、まず記念碑の除幕式が行われました。竣工式では野田村保育会の岩岡吉比古理事長

が完成し、晴れて竣工式となりました。

**施設も充実した
新保育所は
村の復興の
シンボルに**

新しい保育所が建築された場所は、津波の心配を払拭するため以前より1キロメートル内陸、17メートル以上の高台です。



入口に建立された“竣工碑”（被災の様様や助成の内容が記されています）

が「子どもたちに安心、安全な素晴らしい環境を与えていただき感謝しています」と挨拶。また小田祐土村長は「村では共働気で生計を立てている家庭も多く、保育需要が高まっていますので、保育所の早期再建は子育て世代の、たつての要望でした。いま村は復興に向かつて一丸となって前進しています。再建された新しい野田村保育所は重要な子育て支援の拠点であり、目に見える復興のシンボルとして全村民が喜んでいきます」と話しました。

**開所式に華を添えた
園児たちの歌やお遊戯**

竣工式の翌々日の11月1日には開所式が行われ、園児や保護者、職員、関係者170名が集まりました。園舎の玄関前で、野田村保育会の岩岡理事長をはじめとする関係者によるテープカット、年長児童



開所式に行われたテープカット



園児たちの自慢「お屋根の付いた砂場」



開式でお遊戯を披露、竣工式でも喝采を浴びました

代表4名によるくす玉割りが行われました。
 続いて遊戯室に移り、年長児童代表から「とても楽しみに今日を待っていました。みんなで大好きな鬼ごっこをしたいです。きれいな保育所を作ってくれてありがとうございます。ありがとうございました」とかわいいうメッセーが発表されました。その後は園児による歌やお遊戯が披露され、多くの保護者、関係者から温かい声援が送られました。
 臨時で使用していた保育所は狭く、お遊戯の練習場所もままなら



保育室やエントランス、廊下など天窓で太陽光を明るく取り入れています



ない状態でした。一刻も早く伸びのびと安心できる場所に、と待望んでいた保護者や職員のみならず、元気に踊る子どもたちの姿をまぶしそうに見つめていました。
環境が整い、これからは私たち職員が頑張る番
 「今日は、子どもたちの喜ぶ顔が見たくて、いつもより早く出勤してしまいました」と玉川久美子所長は笑います。
 子どもたちがなにより喜んでるのは、広くなった園庭、そして新



カラフルなイスに、園児たちは大喜び



年長園児代表が元気にメッセージを発表

しく変わった遊具施設。中でも一番人気は、砂場です。「うちの砂場はお屋根がついているんだよ」と誇らしげに話します。他にもカラフルなイス、かわいい絵の付いた時計など、すべてが子どもたちのお気に入りです。
 楽しそうに遊ぶ子どもたちを見つめながら玉川所長は「みなさまのお力で、素晴らしい環境を整えていただけました。この後は村を担っていく子どもたちをしっかり保育できるように、私たち職員が頑張る番です」と話しています。

避難先でもより良い教育環境を作り平等に教育を受けさせたい
 昨年12月19日、榎葉町は避難先のいわき市に建設していた榎葉小・中学校中央台仮設校舎および仮設園舎が完成し、開校式を行いました。
 福島県榎葉町内二つの小学校と一つの中学校は原発事故で避難区域に入りました。離れ離れになった生徒たちは、区域外での就学を強いられ、新しい環境になじめず苦勞する子どももいます。「いまままで通り同級生や先生と一緒に授業ができた」と願う父兄の声に応え、昨年4月、榎葉町教育委員会は、避難先のいわき市の民間施設

【榎葉町仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業】
 (第5次助成) **榎葉町町役場**
小・中学校とこども園の仮設校舎が完成

福島県



仮設校舎、特別教室、屋内運動場がプレハブ構造で建てられ、200mトラックのある広い校庭もできました



3校の校歌をみんなで斉唱しました

を借り受け、集まった101名の生徒で授業を再開。現在は142名まで生徒が増えています。
 しかし榎葉町への帰還にはまだ数年の年月を要します。「避難先でも子どもたちにより良い教育環境の中で、平等に教育を受けさせたい」とんな思いを込め、いわき市のいわき明星大学敷地内に仮設校舎の建設を計画。本助成を仮設校舎の建設費用、仮設校舎設置費用、備品購入費用などにあて建設を進めてきました。
 開校式で松本幸英榎葉町長は「この震災の経験をした子供たちは、必ずや豊かな人間性と社会連帯感を身につけ、未来の繁栄に能力を発揮してくれると信じています」と挨拶。荒川秀則代表校長も「一緒に勉強する中学生が小学生のお手本になっています」とうれしそうに話します。
 式の最後に「榎葉町を思う気持ちには中学生も小学生も一緒です。いつの日か故郷・榎葉町に戻れることを信じ頑張ります」と発表した生徒代表者の希望の言葉が心に響きました。

〔水産加工事業者生産回復支援事業〕

(第1次助成) **岩手県**

**国の早期助成が
難しい民間の
水産加工業者の復旧を
支援**



**自社と釜石市の水産業復興へ
ブランド商品を開発**

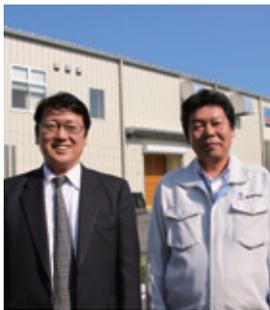
世界三大漁場の一つ北西太平洋漁場の一角をなす三陸漁場と典型的なリアス式海岸という好条件に恵まれた釜石漁港。ここに水揚げされる水産物の品質は高く評価されています。しかし、震災により、沿岸の水産関連施設はほぼ壊滅状態に。岩手県の水産業再生には、漁業・養殖業・水産加工業を一体とした復旧が不可欠ですが、民間の水産加工会社に国からの早期助成は見込めません。そこで岩手県は本助成に申請し、助成金16億円を使い107社の民間企業を支援しました。今回は、その中から釜石市で三陸漁場の水産物を活かして自社ブランドを開発し、復興にかける五つの企業を紹介します。

(株)津田商店

**釜石市の本社、大槌町の
三つの工場も津波で全壊**

三陸漁場の美味しい海の幸を全国の学校へ。釜石市内に本社を構え、大槌町には缶詰工場や冷凍食品工場などの三つの工場を持つ津田商店は、学校給食を主とした自社ブランドの冷凍食品と、サバやサンマの缶詰などのOEM製品を製造していました。

本社で地震に遭遇した津田保之社長。本社も大変な被害を受けましたが、工場のある大槌町近辺は、県内で最も被害が甚大な地域です。地震の後、慌てて電話をかけますが、どの工場にも連絡がつかず、工場に勤務中だった約232名の従業員は全員避難できました



津田保之代表取締役社長(左)と平内浩史課長代理(右)

が、避難後、自宅を心配して戻られた数名の方が不幸にも津波に襲われ、行方不明になってしまいました。

本社、工場は津波に流され、設備もすべて破壊されました。大切な製品レシビのデータが入ったパソコンは海水に浸かり使用不能に。人事情報もパソコンで管理していたため、行方不明の社員の安否確認もままならない状態でした。

**ガレキの中からデータを
拾い出してレシビを再現**

「私の自宅も住める状態ではなく避難所に入りましたが、その後、運良くアパートを見つけたことができました。そこに段々と従業員が集まるようになりました。これからどうなるのだろうか、そんな従業員の不安がる声を聞き、まずは社員やお客様、取引先と連絡を取れる場所を確保しようと、釜石市内に仮事務所を借りて再建を図ることにしました」と津田社長。

ネットすらつながらない仮事務所。ガレキと化してしまった工場。散り散りに避難し、残った正社員は83名のみ。このままでは早期工場再開は不可能と判断し、再開ま



蒸気で殺菌も調理も行える機械を4台導入

で我慢してほしいと製造加工員は一旦解雇することになりました。

残った正社員とともに、全壊した工場の中から書類などをかき集め、破壊されたパソコンからハードディスクを取り出してデータを復旧。会社の命ともいえる製品レシビを復元することができました。

「一刻も早く工場を建て直さなければ社員の生活はもちろん、製造加工員の再雇用の約束を守れない」とそんな時、本助成で県の支援を得られることを知りました。

**風評被害に負けずに
営業努力し売り上げを回復**

「原材料を煮る、殺菌する機械など、水産加工に必要な各種設備を助成金で整えることができました。用地は市の協力で釜石市鶴住居町に確保でき、1年かけ24年4月に工場を建て直し再出発ができました」。再開を待っていてくれた製造加工員を含め、約190名の従業員を雇用することができました。

社員のおかげで全国の学校への販売ルートは確保できていましたが、風評被害の影響もあり、冷凍食品の売り上げは2/3くらいしか回復できていません。じつは再開当初の売り上げは、約1割という惨憺たる状況でした。それでも社員全員でコツコツと営業活動を続け、毎月毎月数字を伸ばしてここまできました」と津田社長。

現在、津田商店は缶詰の製造を含めると、震災前の約8割まで売り上げを回復しています。

小野食品(株)

**開所したばかりの新工場の
2階に船が飛び込んでいた**

小野食品は、サケやサバ、マスを釜石市内の二つの工場で焼魚や煮魚に調理し、商社や問屋を通じて、全国のホテルや外食産業に卸していました。

「これがうちのビジネスの7割を占め、残りの一部をエンドユーザー向けに大手通販会社を通してコツコツと販売していました。しかしバブル崩壊後、このままでは先細っていくのではと懸念し、自社ブランドを開発して通販事業を拡大することにしました。それが2005年のことです」と小野昭男代表取締役は振り返ります。最初は手作りのチラシを配り、販売会に来場いただいたお客様に買っていたことからスタート。それが好評でリピーターを生み、2009年には新聞広告も打ち出



小野昭男代表取締役

「よし、これから本腰を入れていこうと、一昨年、大植町の既設工場を買い取り全面改修し、開所式を行いました。震災が発生したのはその2週間後です。変わり果てた工場を見た時は、本当に愕然としました。開所式のセレモニーを行った2階には、船が飛び込んでいました」と小野さんは話します。

通販事業の需要が回復し 新たな生産設備が必要に



加熱、調理、殺菌、冷却までできる圧力容器

「水が入ったため機械全部が駄目になったと思っただけですが、一番高いトンネルフリーザーやレトルトの装置など大きな機械はオーバーホールで済みそうだとわかりました。ならば1日も早く再開させようと動き出したのです。三つの工場すべてが被災しましたが、辛うじて建物が無事だった一つの工場を改修し、一昨年6月に製造を開始。営業を再開してから、製品の納め先は大きく変わりました。

「風評被害もあり、離れていく取り引き先もありましたが、それでも自分たちの商品を買っていただくお客様がいっぱいありました。それが学校給食と病院施設関係、そして通販事業で獲得したエンドユーザーだったのです。」

通販事業のお客様は5000件ほどに伸び、ならば本格的に事業の柱にしよう、生産体制の立て直しを図ることにしました。

地元各社が地域ブランドを作り上げて復興の一步に

そして昨年7月に本助成で必要な設備を整え、全壊した一つの工場を再建。4カ月後の11月には約1万4000件と順調にお客様が増えています。

「地元各社が工夫して自社ブランド商品を作り出すことで、釜石ならではの世界を確立できたいですね。それでファンを広げていければ、やがてうちにも扱わせてほしいと全国の通販会社からオファーも入り、販路も広がっているのではないのでしょうか。そんな流れが作れたら復興の一步につながるのでは、と考えています。」

最後に小野さんは「今回の助成だけでなく魚価安定緊急対策事業（第1次助成）でも原材料の保管などを助けていただき感謝しています」と話しています。



西明義晃専務取締役(左)と和田巨工場長(右)

「最初は三陸地方で作られた商品を買って付けた販売してはいたのですが、いっ自分たちで作って売ろうと釜石、山田、唐丹に工場を構えたのです」と西明義晃専務。

阪神低温は、三陸漁場の美味しい水産品を消費者にそのまま届けたいと当時では新しい「産直」にいち早く乗り出した会社です。産地で素材を1次加工し、新潟の工場



通販のお客様さまが増えて、従業員も活気づく

阪神低温(株)東北事業所 三陸漁場の海の幸を産直で販売するため釜石へ

や本社の工場に送り最終製品にして全国に出荷します。

「産地で最初の素材をやるのが大事なんです。水のきれいな環境の良い所で、産地の素材を知り加工に手慣れた従業員が作るからこそ良い物にできる訳です。」

最初は学校給食からはじめ、生協、量販店へと販売ルートを広げ、これからだという時に、津波に襲われました。

阪神淡路と東日本大震災 二つの災害を乗り越えて



「仕事が再開できてうれしい」と、従業員のみなさん

阪神低温は、阪神淡路大震災でも被災しています。その時は本社工場が全壊、液状化で鳴浜漁の工場も操業停止になりました。その悪夢が再び襲いかかります。

「私は釜石の冷凍工場にいて、従業員と一緒に高台へ避難しました。津波は、工場の2階にある神棚の下まで届いていました。その威力は凄まじく、工場の心臓部である

またも大震災で大切な工場を奪われた阪神低温ですが、先の震災から立ち直った不屈の精神で復旧に乗り出します。

「一昨年12月に釜石の冷凍工場を再建しました。助成で凍結庫、冷凍機、真空包装機、金属探知機、製氷機、製氷庫設備を購入でき、製品の品質維持や保管に欠かせない設備を整えることができました。規模が縮小したため従業員も大幅に減りましたが、まだ周囲の復旧も進んでいませんので、諸手を上げて喜べませんが、頑張っていこうと再スタートを切ったのです」と西明専務は話します。

大型冷凍庫の厚さ20cmにもなる鋼鉄の扉が、ハの時に折れ曲がってしまいました」と和田巨工場長。

他の山田、唐丹の2工場も津波で壊滅状態になりました。

釜石の工場を再建 産直の素晴らしさを再び全国へ

現在、アメリカオオカカイカ、本紫イカ、真イカの1次加工に特化し、1カ月約130tの生産量で、本社工場など自社グループで使用する分は生産できています。工場は一つになりましたが、生産効率を高め、外部への出荷も視野に入れながら、釜石ブランドの産直展開の復活に頑張っています。

※魚価安定緊急対策事業/損壊した沿岸部の冷凍倉庫に代わり、冷凍コンテナや内陸部の冷凍倉庫を緊急的に借り上げ保管する事業。倉庫保管料や運送費等を助成します。若手県が申請し、小野食品、井戸商店、伊藤商店も支援を受けています。

(株)井戸商店

**漁船や車両がなだれ込み
本社工場の1階は完全に損壊**

業務用イカ素材の製造・販売を主事業にする井戸商店には、釜石と大槌に三つの工場がありました。「市の大津波警報が出て、すぐ近くの大平中学校に全員で避難しましたが、従業員が無事でなによりでしたが、本社工場の1階は、車だけの船だのが入り込んでめちゃめちゃでした」と大橋武一社長。

三つの工場はすべて損壊。組合の冷蔵庫に預けていた原料も全部使い物にならなくなっていました。「震災直後は避難所にいる従業員のために、毎日リュックを背負って食料の調達に歩きました。で



再建した工場の前で、大橋武一社長

**三陸漁場の海の幸で
自社ブランドを開発**



サバ煮オイル焼 (株)津田商店



海のごちそう(頒布会) 小野食品(株)

「再開を待っている」と励ましの声がかかりました。さらに被災を逃れた外注先が工場を貸してくれることになり、震災から1ヵ月後に再開の一步を踏み出しました。まずはじめたのは、安心して使える食材を待っている学校給食への対応です。避難所にいる従業員の協力も大きな支えでした。そんな地道な努力が続いている時、県から本助成による支援が実現します。



イカの一時加工から
自社ブランドの開発まで

も状況は惨憺たるもので自力での工場再建は不可能でした。従業員を集め、申し訳ないが解雇させてほしい。もし再開できた時は戻って来てくれと話をしました」。

**地元各社が地域ブランドを
作り上げて復興の一步に**

(株)伊藤商店

**壁もない工場にシートを張り
急場の作業所から再スタート**

「二度は断念した工場再建が叶うと思えば当然にうれしかった。助成で金属探知機、自動梱包機、真空包装機、冷風乾燥機、フードカッターを購入。釜石の新工場が完成したのは昨年5月でした。「まだ売り上げは震災前の4割ぐらいですが、現在自社ブランドでイカウインナーを開発して、新規のお客様にアプローチしています。以前の事業規模に回復させて全従業員が戻れるように頑張ります」と大橋社長は話しています。

伊藤商店は、大槌町に3棟連なる工場を有し、60名の従業員がイカの塩辛やサンマのみりん干しなどの1次加工を中心に働いています。しかし、押し寄せた津波は昭和10年の創業以来積み重ねてきたすべてを破壊してしまいました。「工場はすっかりガレキに埋もれてしまい、この片付けからはじめました。6月には終わったのです

**まだ復旧が行き届かない
この町の希望の灯りに**

「建物が完成したのは昨年1月。



従業員と力を合わせて復旧に励む伊藤治郎常務(右から4番目)と伊藤三郎部長(右から3番目)

が、周辺はまだ大変で自分の所が終わったからといってガレキ撤去を止めることはできなかったです」と伊藤治郎常務、伊藤三郎部長は話します。仕事を再開できたのは、秋サケの水揚げがはじまった一昨年の11月です。「まだ壁が抜けたままの工場にブルーシートを張り、助成で購入した冷蔵庫と凍結庫を導入して作業をはじめました」。



完成からフル稼働の凍結機

本格的に仕事を再開できたのは3月からですね。いまは水揚げされる水産物に応じてできる仕事をどんどんやっています。塩蔵ワカメ、イサダやサバ、サンマなど、時期の魚を冷凍して処理し、地元加工屋さんに卸しています。」
3月のイサダの時期には1500tを製造。加工量が増え社員も20名まで戻すことができました。「大槌市場が再開してうちは水揚げの90%以上を買っています。仕事を増やせば雇用もでき、地域の活性化にもつながりますね。」
周辺はまだ復旧の見通しが立たない中、伊藤商店に復興の明かりが灯りました。



シーフードミックス
阪神低温(株)東北事業所



イカウインナー
(株)井戸商店

イカの一次加工 (株)井戸商店



塩蔵ワカメ (株)伊藤商店

震災により多くの設備や施設を奪われた岩手県内の魚市場や漁港。釜石市の漁港も大きな被害を受けました。復旧には養殖用の資機材をはじめ、漁船の陸揚げ用機械、水揚げの安定化を支える製氷・貯氷施設、荷捌き用の機材などの購入が必要です。しかし被災した漁協には、自力だけで復旧できる力も残されていません。そこで岩手県は本助成を活用し、『水産共同利用施設復旧支援事業（第2・3・4次）』と『製氷・貯氷施設回復支援事業（第3次）』により、県内13の魚市場が一刻も早く再開でき、かつ水産物の鮮度維持を行い、水揚げ量の増加を図れるように支援しています。

被害の大きな釜石市
自力だけの復旧は困難

〔水産共同利用施設復旧支援事業〕

（第2・3・4次助成） 岩手県

〔製氷・貯氷施設回復支援事業〕

（第3次助成） 岩手県

岩手県の水産業の復興へ
魚市場・漁港を多角的に支援



収穫したアワビを手に笑顔で計量の列に並び箱崎漁港の生産者

釜石東部漁業協同組合
（箱崎漁港）
海とともに生きる
本来の暮らしを取り戻したい

箱崎港を訪れた昨年11月22日は、アワビの口開けの日でした。

「今年は天候に恵まれず、今日が初の口開けです」と小川原泉組合長。仮設テントでシーズンはじめの計量に並ぶ組合員の表情は、寒風の中でも喜びに満ちています。箱崎漁港は小さな漁港ですが、



震災時、交通が遮断されて陸の孤島になったと話す小川原泉代表理事組合長（右）



助成で導入した燃料補給施設

ワカメとホタテの養殖、定置網では春にはマス類、夏にはサバ、秋にはサケと多くの水産物が水揚げされます。ところが震災で大半の水産施設が破壊されてしまいました。震災後は定置網の補修や漁船の手配などに小川原組合長をはじめ漁協が中心となって走り回り、震災から約7カ月後の10月に一部の定置網漁を再開。養殖ワカメやホタテは、共同で再スタートしました。しかし、このままでは組合員の生活を支えることは困難です。そこで水産共同利用施設復旧支援事業（第3・4次）により、ワカメを保管する仮設の冷凍冷蔵施設、水揚げされる水産物の荷捌き施設や加工処理施設の修繕、また燃料補給施設などを整備しました。

「昨年11月には定置網、養殖とほぼ震災前の規模で再開できました」と小川原組合長。しかし、水揚げ量はまだ30%程度です。

「海のそばで生活し漁業に従事する組合員が、いまだ山の仮設住宅に住んでいます。住める家も、仕事も十分ではありませんが、アワビを手に並ぶみんなの笑顔を見ると、1日も早く漁業を完全に復活させなければと思います。」

釜石市漁業協同組合連合会
（新浜町魚市場・第2魚市場）

助成で導入した設備をフルに
活かして魚のまち・釜石復活へ

「被災した市場の再開には、衛生管理施設の整備が不可欠でした」と原田祐吉参事は話します。そこで釜石市漁業協同組合連合会は、魚市場経営基盤再生事業（第2次）で、昨年4月に新浜町第2魚市場の殺菌冷海水製造装置20t・1基と移動式砕氷車両を導入。11月には新浜町魚市場に同装置30t・1基を導入するとともに、新浜町魚市場の一部竣工も行いました。また、県が申請した製氷・貯氷施設回復支援事業（第3次）と水産共同利用施設復旧支援事業（第4次）により、製氷・貯氷施設の修繕や荷捌き施設内の必要設備、機能の取得確保も進めました。

「水の消費が激しい夏季は特に、4月に導入した移動式砕氷車両が大活躍してくれました」と原田参事。移動式砕氷車両なら水の供給を素早く行えるため漁船にも好評で、これを聞いた他の漁協が見学に来るほどでした。



昨年11月に新浜町魚市場の一部竣工と殺菌冷海水装置導入を完了



再稼働した製氷施設と移動式砕氷車両



修繕された製氷・貯氷施設は700t貯氷可能

「いまはサンマの水揚げが主力で、全体の水揚げ量は震災前の約6割です。さらに水揚げを増やすには、小型漁船の定置網の水揚げにもっと力を入れなければなりません。そこで定置網で獲れる多くの魚種を選別して競りにかけられる体制を、平成29年完成予定の新しい魚河岸地区魚市場で実現する計画です。魚のまち・釜石の復活に向け、助成いただいた設備をフルに活かして頑張っていきたいと思います。」

宮古漁業協同組合 (宮古市魚市場)

三陸の生産者が一体となり
再開した市場の水揚げに協力

「考えられないほど大きな地震と津波でした」と佐々木隆参事。日頃の避難訓練が功を奏し、観光客も含め職員全員が無事に避難できました。しかし、津波が引いた後の魚市場は見るも無惨な姿に。電気も電話も通じない中、地道なガレキ撤去がはじまりました。

地震がきたのは、まさに水揚げを行っている時で、船はそのまま沖へ避難しました。また、フォークリフトなどの一部の機材も津波の前に退避させることができました。無事に残った機材や漁船を活かし、一刻も早く水揚げできるようにしたいと、震災から1ヵ月後の4月11日に市場を再開しました。

「近隣の被害もひどかったですからね。正直、1匹でも魚を水揚げできたらいという気持ちで再開しました。すると大船渡や久慈の方の漁師さんがここ宮古に水揚げしてくれて…。三陸の生産者が力



宮古漁業協同組合の(右から) 佐々木隆参事、寺井繁参事、石田幸樹課長



貯水施設から直接船に水を供給

を合わせ第一歩を踏み出した感じです」と佐々木参事は話します。

**市場にかかわる人は多い
だから復旧の喜びも大きい**

ただ、このままでは秋から冬のサンマ、サケ、タラなどの本格的な大量水揚げに対応できません。そこで水産共同利用施設復旧支援事業(第4次)で市場管理棟や鮮度保持タンクなどの市場の運営に不可欠な機器などを導入。また製氷・貯氷施設回復支援事業(第3次)により従来同等の製氷能力1000t/日、貯氷能力10000tの施設が完成しました。

「この魚市場にかかわる人の裾野は広く、早期に復旧を進めなければ漁師さんや地域の方の生活、さらに加工会社などの雇用問題にも影響しますので、助成には心から感謝しています」。県内の加工会社約107社のうち23社が宮古市魚市場の水揚げに頼っていました。



製氷能力は1日100t、貯氷能力は1,000t

利用する漁船は1t未満のサツパ船が8割、他が底引き網のトロール漁船や外来の大型漁船です。

「設備が段階的に整うとともに水揚げ量も増えてきました。定置網ではサバやブリなどさまざまな魚が揚がり、昨年11月に完成した製氷・貯氷施設はフル稼働中です」。威勢のよい競のかけ声が場内に響き渡る宮古市魚市場。三陸漁業の中核をなすかつての活気を、着実に取り戻しつつあります。



製氷工場の「場」の看板は津波に流されたままです

大船渡市

**[製氷・貯氷施設回復支援事業]
(第2次助成) 岩手県
震災前より3倍の製氷
能力で氷を安定供給**



待望の製氷・貯氷施設が完成

**水揚げから流通まで
大船渡魚市場の製氷・貯氷施設を強化**

震災前の水揚げ量は、年平均5万t。大船渡魚市場は、岩手県沿岸南部の漁業者や沖合の三陸漁場で操業する漁船の三陸沿岸の重要な水揚げ基地として栄えてきました。ところが震災により、市場の機能は完全に停止しました。大船渡魚市場は、県や市の協力を得て、震災から3ヵ月後の6月に市場の営業再開を果たします。水揚げは徐々に戻り、一昨年のサンマの水揚げ金額では全国5位にまで回復しました。

「大船渡魚市場では、震災前も水揚げ最盛期になると、地域全体の製氷能力が追いつかず、コストのかかる移入氷に頼っていました。ぜひとも製氷・貯氷能力を高めた新しい施設が必要だったので」と岩脇洋一代代表理事組合長。そんな時、岩手県の製氷・貯氷施設回復支援事業の助成を受けることが決まり、昨年10月に待望の新施設を完成しました。

竣工式で岩協代表理事組合長は「大型の製氷・貯氷施設が完成し、地元漁船はもちろん外来漁船の水揚げにも対応できる体制を整えることができました」と喜びを語りました。現在、製氷能力は震災前の3倍以上の1日100tに、貯氷量も2260tから3000tと約33%増量となっています。

第3次助成先

岩手県 製氷・貯氷施設回復支援事業

定置網漁によるサケ漁と「つくり育てる漁業」の象徴であるウニ漁が盛んな洋野町では、本助成を活かして再建した八木北港の町営魚市場に町営による新しい製氷・貯氷施設を計画。昨年11月に地鎮祭を執行了いました。



●鉄筋コンクリート造り(一部鉄骨造り、一部2階建て) ●延床面積: 1,516.27㎡ ●製氷能力: 71.8t/日 ●貯氷能力: 317t



地鎮祭が行われた建設予定地(再建された町営魚市場に隣接)

田野畑村漁業協同組合

**震災前の水揚げ量を目指し
四つの漁港の体制を整備**

一つひとつは小さくても地域の生活の核となる大切な漁港を計四つ管内に持つ田野畑村漁業協同組合ですが、津波により各港の重要な機能が破壊されました。そこで水産業共同利用施設復旧支援事業の第2次助成で平井賀漁港、羅賀地区、机漁港に計8台の小型漁船用の巻揚げ機を整備。第4次助成では、島越漁港に魚市場に必要な万丈カゴ、パレットやフォークリフトなどを導入しました。



修繕した製氷(10t/日)、貯氷(15t)ユニット

「昨年12月に仮設市場を開きましたが、被災後は、船も資材も建物もなかなか用意できず思うように仕事ができないもどかしさがありました。それがこの助成で一つずつ整備できつつあります。サケの放流施設やアワビの種苗施設が破壊されたため、まだ本来の状態



田野畑漁業協同組合と田野畑村役場のみなさん、中央が中村芳正代表理事組合長

設備が揃い、意欲を失った漁師さんたちも奮起してきた

「この港は完全に海に沈んでしまい、波が引いた後はなにもなくなっていました」と山口智参事。

それでも震災から3ヵ月後にブルーシートの仮設市場を再開。9月からの秋サケの水揚げに間に合わせる事ができました。その後、本格的な市場再建に乗り出し、水産業共同利用施設復旧支援事業の第3・4次助成で、魚市場で使用するフォークリフトや鮮度保持タン

野田魚市場

クなどを整備。また製氷・貯氷施設回復支援事業(第3次)により、スラリアイス製氷機を昨年3月に導入し、魚市場業務の効率化、水産物の高鮮度化を図っています。

「秋サケ、養殖ワカメとホタテ、またアワビやウニなどすべての水揚げ量を取り戻すには、あと5年かかるかもしれません。でも設備が整っていくことで、意欲を失っていた漁師さんたちがもう一度頑張ろうと奮い立ってくれるようになります」と山口参事はうれしそうに話しています。



スラリアイス製氷能力18.5t/日、ドライアイス製氷能力5t/日、貯氷能力30tとなる新施設



野田村漁業協同組合のみなさん、左が山口智参事

南三陸町

【水産基盤施設緊急復興事業】
(第1次助成) **南三陸町 県内初の仮設カキ処理場が完成**



完成したカキ処理場(鉄骨平屋建て508㎡、敷地3,069㎡)

塩水取水塔も復旧、安心の衛生管理で新鮮なカキを全国へ

「例年よりも身の大きな立派なカキが獲れています」と佐々木憲雄運営委員長はうれしそうに話します。南三陸町は県内一の漁獲量を誇る秋サケやアワビが有名ですが、志津川湾内で養殖されるワカメ、ホタテ、カキなども絶品です。しかし、海岸沿いに連なっていた

多くの作業場や加工場は、震災ですべて流されてしまいました。そこで本助成を活かし、一昨年の10月に仮設市場を、昨年5月に仮設ワカメ作業所を、そして10月に「仮設カキ処理場」を完成しました。

震災前は志津川地区、戸倉地区に計6カ所あったカキ処理場を一つの仮設カキ処理場に集約。ここに殻カキ処理穴60個を備えることで、効率的、集中的に作業できるようになりました。また、地下のパイプを通して仮設カキ処理場に海水を送る「塩水取水塔」も復旧し、課題であった衛生管理面をクリア。安心して美味しいカキを提供できる体制を整えています。

県内で最初に完成した仮設カキ処理場で行われた落成式で佐々木委員長は「回復した海で大きく育ったカキを、いち早く全国へ届けられるように頑張ります」と、挨拶しました。

第3次助成先

福島県川内村 川内高原農産物栽培工場建設事業

昨年10月、福島県川内村で平成25年3月に完成が予定される川内高原農産物栽培工場の地鎮祭が行われました。風評被害に負けず農業再生を進められるように、安全な地下水を利用した「水耕栽培」の施設を建設しています。



●鉄骨造、完全人工光型(完全閉鎖型) ●建築面積:2,467.10㎡/敷地面積:5,009.10㎡ ●栽培面積:4,324.8㎡(9.01㎡×8段15ライン×4室)
●栽培予定作物:リーフレタス類、ハープ類 ●目標雇用人数:25人



農業再生を祈願し鎌入れの儀を行う有富理事長



児玉信夫組合長(左)と内海純業務課長(右)

スラリーアイス製氷機で
高級魚の付加価値を高める

牡鹿半島の先端、金華山を横に見る鮎川漁港は、周りに遮る物がなく、何百艘の漁船や水産施設、そして民家が津波の引き波に持ち去られ、海はガレキの山と化してしまいました。「津波は三段階で港を襲い、特に第三波はまるで悪魔

〔養殖用資機材等緊急整備事業〕

(第1次助成) 宮城県

〔高鮮度水産物供給施設整備事業〕

(第1次助成) 宮城県

養殖から水揚げの体制まで
牡鹿漁協の復旧を
複合的に支援



5t/日のスラリーアイス製氷機。仮設ではない建物が震災後初めて完成

の様子でした」と牡鹿漁業協同組合の児玉信夫組合長は話します。そんな漁港の復旧を支えたのは、宮城県が行った養殖用資機材等緊急整備事業(第1次助成)と高鮮度水産物供給施設整備事業(第1次助成)です。
鮎川魚港は銀ザケや塩蔵ワカメの養殖で有名。また水揚げされる魚も金華サバやヒラメと高級魚が多く、魚体を傷めず鮮度保持でき



ワカメの刈り入れとともに仲間も帰ってきたと話す熱海さん



銀ザケのエサ倉庫を前に復旧の様子を話す阿部さん

資機材を揃え養殖業も回復
水産物の評価を取り戻したい

助成を受けて真っ先に水揚げを再開したのがワカメの養殖です。「全滅した養殖資機材や棚は助成で用意できましたが肝心の種がなかった。そんな時、金華山沖の定置網に流された種が付いていると聞き、ほっとしました。種の植え付けを再開したのは震災から4カ月後です」と牡鹿漁協わかめ養殖団の熱海秀人さん。植え付けから2カ月ほどで収穫ができ、鮎川魚港のうれしい一歩となりました。
一方、銀ザケの養殖もほぼ同時に再開に動き出しました。
「海の養殖生け簀は津波でやられてしまいました。稚魚を育てる山の養殖施設は無事でした。海のガレキ掃除が終わってすぐに助

〔農業生産復旧緊急対策事業〕

(第2次助成) 宮城県

農地も機械も奪われた
農業生産者
復旧に向けて
93事業体を県が支援



塩害に負けず元気に成長するトマト

成を活かして再開し、1kgぐらいに育ったものから順次出荷しているのですが、風評被害のため魚価が安定していないのが辛いです」と牡鹿漁協銀ざけ養殖団の安部勝

敏さんは話します。
いまは定置網の水揚げも回復し、鮎川港のブランドである金華サバや銀ザケなどの評価を取り戻すため、力を合わせて頑張っています。

やもと園芸生産組織連絡協議会(菅原満雄氏圃場)
なんとかこの場所に留まり
トマト栽培を続けたい

宮城県は、菅原再開に立ち上がった農業生産者を支援するため、本助成金約13億円を使って全93の事業体に助成しています。やもと園芸生産組織連絡協議会の菅原満雄さんは、トマトのパイプハウス再建の助成を受けました。
「まさか津波が自宅までくるとは」と菅原さん。バリバリという轟音とともに津波は1000坪あつ

たトマトハウスの8割を押し流しました。周りの農家の被害も甚大で、中には破壊された家や農地を手放し、集団移転する人もいます。震災後、菅原さんはガレキや泥を撤去しながら、家族が残ったハウスを修繕し、菅原再開へ小さなスタートを踏み出しました。
「塩害で駄目だと思われていた土地で美味しいトマトが作れた時、ああこの土地でもう一度やり直したいと心から思いました」。
そんな時、本助成の話を知り、昨年7月に500坪のミニトマトのハウスを再建することに。必要な機材も揃えることができました。

同じくやもと園芸生産組織連絡協議会の川元信正さんは、三つ葉

やもと園芸生産組織連絡協議会(川元信正氏圃場)

個人経営での立て直しは困難
この助成で前に進めた

「ハウスが完成して、すぐに苗を定植したので、昨年9月には本格的な収穫をはじめられました。猛暑で収穫量は少し落ちましたが、売り上げ的には例年近くまでいきほっとしています。いま離農した方の田圃を組合が共同で耕作する話があり、農地整備を進めています。これが実現してからは、この地域の本格的な復興になるでしょうね」と菅原さんは話しています。



奥さんと一緒に再開した喜びを語る菅原さん



助成を受けたパイプハウスと合わせた700坪でトマトの定植をしています



三つ葉の水耕栽培はコンピュータで管理



定植したすべての苗を活かす移植方法を説明する川元さん

の水耕栽培を行っています。「津波でハウスも作業小屋も水没し、まだ返済が終っていない機械やトラクターなども全部破壊されました。なかなか水が引かず、ハウスのガレキや泥を撤去できる状態になるまで1ヵ月も待ちました」。機械さえ直せば水耕栽培なので土地の塩害の心配はありません。以前地震で壊れた機械を修繕した経験があり、直せるものは極力自力で行いました。しかしハウスの建て直し費、新規購入の機械費などを計算すると再開費は大きく膨らんでいきます。「個人経営ですので国の補助も受けられず、どうしたものかと悩んでいましたので、本助成は本当にありがたかったですね」。被災状況から900坪あったハ



日が経つほど熟成され旨味が増す地場産の生味噌「岡田産づくり」

岡田地区で採れる大豆やお米で作られる味噌「岡田産づくり」は、

岡田生産組合

ブランド味噌の復活で組合員の生活を取り戻す

「震災から5ヵ月後に再開できました。普通の土耕栽培ならこうはいかなかったですよね。作業の大半を機械化し、コンピュータで管理するこの水耕栽培なら約45日で三つ葉を出荷できます。いまは、1日約2400束を出荷でき、売り上げも徐々に回復しています」と川元さんは話しています。



出荷作業に忙しい復職したパートさん

第4次助成

福島県東西しらかわ農業協同組合 地域農業再生基幹施設緊急整備事業

損壊した5カ所の農業倉庫を東西2カ所に再編し、米の低温管理を実現する計画です。昨年9月に東部共同農業倉庫を竣工。12月に西部共同農業倉庫および矢吹統合支店(仮称)の新築起工式を行いました。

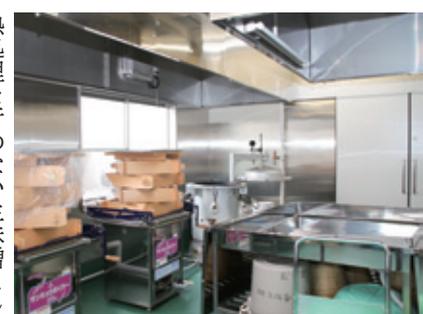


起工式で鈴木組長は「こを地域復興の起点に」と挨拶しました



- 低温農業倉庫…建物1,216.29㎡、建築面積1,304.83㎡、米の標準収容量28,000俵
- 矢吹統合支店(仮称)…建築面積916.54㎡(直売所、購買店舗、物品倉庫3施設含む)

熱処理を行わない生味噌として多くのファンに支持されています。「みんな自宅も田圃も津波で失い、がっくり肩を落としています。その姿を見て遠藤組合長は「ぎっと復活するように頑張っか」と、助成の手続きから設備の手配、バラバラになった組合員のケアまでいろいろ奔走されてきました。加工班のみなさんもその頑張りに応えてやっと再開、5tもの味噌の仕込みがようやく終わり、販売までできましたので、さきやかですが骨休めにでかけているんです」と菅原組合長の鈴木久可さん。



津波で流された加工設備を助成で新たに購入

震災で味噌加工施設は、土台だけを残して流出しました。味噌が1t入る貯蔵コンテナは、1km以上先まで流されていました。「震災後、また食べさせてください」と激励いただいた多くの方の声。そして、加工施設の設備や耕作機械などを支援いただいた本助成に心から感謝しています。昨年3月に施設を再開し、11月に販売を開始。用意できたのは震災前の約半分の5tほどで直売所への販売でしたが、あつという間に完売しました。今年は震災前と同じ量を仕込み、より多くの方に販売できるよう目指しています。



大豆などを作る作業班が活用するトラクターも用意できました

私たちの賛助会費が活かされています ■ 障がい者福祉助成金

助成先レポート

Vol. 16

共に働き、共に生きるまち。

その実現へつぎつぎと戦略を打つ

NPO法人やまぼうし
やまぼうし平山台
就労継続B型(日野市)

70年代の府中療育センターの当事者運動が活動の原点だという伊藤勲さんが理事長を務める(NPO法人やまぼうし)は、80年代半ばより「障がい者が地域で働くこと」に取り組み始めます。味噌とお茶の行商からの、手探りのスタートでした。以来、着実な歩みで障がい者雇用の拡大に挑戦しつづけています。

◆ 多様な地域ニーズに対応

日野市は東京の多摩地域に位置し、新撰組ゆかりの地としても知られています。足かけ30年、障がいのある人も

ない人もいっしょに働き、暮らしていける地域社会の実現をテーマに、さまざまな活動を展開しているのがNPO法人やまぼうしです。生活援助からケアホーム事業、自然豊かな多摩の環境を保全する取

改装したベーカリーカフェで記念写真、後列左が河合西東京支部執行委員長



改装して広くなったベーカリー工房、増産体制も整いました



以前小学校の下駄箱が並んでいたところを改装したベーカリーカフェ平山台

◆ 避けて通れぬ設備投資

「十字架を背負ったわけで、これはいたいへんなことになったなど(笑)。これまではマイペース。目標は公言しても期限までははつきりと公約してきませんでしたから」と、助成決定の報せを聞いたときの感想を述べたのは伊藤勲理事長です。

「やまぼうし平山台」は、少子高

仕事に込められた 夢・希望・こだわり



● ヤマト運輸労働組合
西東京支部執行委員長
河合 敏郎さん

まず、誰もが笑顔で働いていることにびっくりしました。そして、お互いに周囲のこと、自分のことをしっかり考えて動いているのもよく分かりました。

と同時に、作業の一つ一つに、夢や希望、こだわりが込められているのに、心揺さぶられました。企業に納めるお弁当なのか、大学で販売するお弁当なのか…。それぞれに必要な配慮をしている。一概にはなく、お客さまそれぞれに合わせたサービスがなされています。

しかし、それを実現するには、現場で働く障がい者一人ひとりにきめ細やかなフォローがあってこそ。スタッフの方々のご苦勞にも感心させられました。

そうしたマネジメントの部分は、自分たちの職場にも当てはまる大切なこと。障害のあるなしに関わらず、やはり人は一人ひとりちがう個性を持った存在であるという、基本を再認識するよい機会をいただきました。



出張販売にできたてのお弁当・パンを配送します

齢化のおおりに受けて廃校になった小学校の一部を、地域住民の要望を受けて改装するかたちで、平成21年に事業をスタートしました。卒業生の思い出を守るよう当時の面影を残しつつ、正面玄関をカフェスペースに。給食用の厨房室は弁当製造のキッチンに生まれ変わ



給食室をお弁当づくりのキッチンに改装、毎日300食のお弁当を配食

りました。有名店で経験を積んだベテランシェフを雇い入れ、一般の同業他社に負けぬ品質を追求しました。そうした地道な努力も手伝って、平成22年からは近くの大学キャンパスに、ハンバーガーショップの出店も果たします。売り上げも着実に伸び、本年度



明星大学スターショップスは、学生とのコラボレーションで店舗を運営。昼食時は行列ができる人気店

は3000万円の大台に手が届きそうなどころまで来ましたが、工賃5万円を実現するには年間売上5000万円を目指さなくてはなりません。そのためにはお弁当、ベーカーリーの増産が欠かせませんが、現在の設備はすでに生産数の限界に近づいていました。

今回の改修でまずはベーカーリー部門増産の目的が立ちましたが、熟練の利用者さんが一般就労にむけて卒業したこともあり、改修の

「社会的企業」を見据えて

効果はまだこれからです。



理事長
伊藤 勲さん

販路の拡大について、伊藤さんは「自分たちの力量を見極め、それをやりきることと社会的信用を得て、企業として事業として認知してもらえれば、次の仕事は営業しなくてもやってくる」、そして「障がい者に合わせて仕事をつくるようなことは敢えてしない」と語ります。

なぜなら店舗によってメニューも客層も異なります。試作を繰り返し、スタッフを先行して配置、生産活動のペースを完成させることを優先し、徐々に障がいのある方を配置に加えていく。この手法でこれまで成果を上げてきました。



スターショップスのメンバーと河合執行委員長

この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコメール便配達事業

わからないこと、できないうことが、 成長の力ぎでした。

名古屋駅からJR中央本線で5駅、ナゴヤドームからほど近い場所に「のぞみ」があります。
メール便配達を始めて、もうすぐ7年。全員がひとつとなつて、ときばきとこなす仕事の裏には、
ミスをなくし、作業をスムーズに行う工夫が、山のように蓄積されていました。



配達前に、ホワイトボードに書かれたチェック項目を、口に出して丁寧に読み上げる廣田吉伸さん。

朝、9時半。就労継続支援B型事業所「のぞみ」では、4人のメイトさんによる仕分け作業が始まっています。きびきびとスムーズに作業が進みます。職員が入るのは、なにか分からないことがあった時だけ。時々、リーダー的存在の稲山邦彦さんの、あわてなくていいですよ、と仲間にかけるやさしい声が響きます。
見ていて驚かされたのは、作業工程のあちこちに、ミスをなくすための手引きがちりばめられていること。●小さな封筒は、まぎれやすいので大きな袋に入れる ●2冊ある配分量は、輪ゴムで留める ●ひとつさやすい素材のものは、クリップで留める、など。事細かな注意書きが、作業台に置かれています。
また、机の横に並んだホワイトボードにも、さまざまなチェック項目が書かれています。その中のひとつ、「出かける前にチェック」には、●帽子をかぶっているか ●マスクをアゴにかけていないか ●服やスポンはだらしなくないか ●携帯の充電がし
てあるか確認する、など。



- 愛知主管支店 守山幸心センター
面積9.1km²/人口47,254人/世帯数24,098世帯
- 医療法人八誠会 福祉サービスセンター
就労継続支援B型事業所「のぞみ」

2006年2月、メール便配達事業を開始。メイトさんは、約10名。
1日の平均配達数、120~130冊。その他、パン工房、クリーニング、
清掃などの仕事を取り扱う。

「障がい者のクロネコメール便配達事業」
参入施設数 318施設 従事者数 1,415人 (2012年10月現在)
お問い合わせは……(公財)ヤマト福祉財団 メール便担当
TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165
<http://www.yamato-fukushi.jp/>

「配達の時のチェック」には、●カバンから出す人とポストに入れる人で、家の名前を2重に確認する ●カバンから出す時は、ポストの前で出す ●玄関の前で、ずつつと立ち止まらない、など。
メイトさんは毎回、チェック項目を声に出して読み上げてから、配達に出かけます。それが、メール便配達の儀式となっているのです。

外に出ると、 思いがけない問題が。

「ミスがあるから、工夫が増えていったんです」と、「のぞみ」の西村小百合施設長は笑います。スタート時は、さまざまなトラブルが起つて大変だったそうです。
「のぞみ」が、メール便配達事業を始めたのは、2006年の2月。職



写真右／佐々木泰雄さん 最初は地図の見方がわからず、苦労したと言います。しかし6年目の今は住所がすべて頭に入っていて、人間地図と呼ばれているそう。公園で休憩をとるのが楽しいと言う佐々木さん。65才まで働きたいと話します。
写真左／後藤恵美さん 2年目の彼女。今も、メール便のユニホームを着ると緊張するそうです。いろいろな人に見られるから、身だしなみにも気を付けるようになったのだとか。子供さんが出てきてくれるとうれしい、と楽しそうに話してくれました。



稲山邦彦さん いつも仲間を気遣って、仕事中にやさしい声かけをしてあげるメール便配達リーダー的存在です。後輩がどんどん育っていくのが、やりがいになっているのだとか。また、この仕事は、人と人とのふれあいを楽しめるのだそうです。夏の暑い日に、飲み物をもらったことが忘れられない思い出。メール便は、単に一枚の紙切れじゃないと言います。

廣田吉伸さん 始めて2年目。最初は地図の見方が分からず大変でしたが、今はメール便が多いと、今日はがんばろうとやる気が出るそうです。メール便を始めてから、暗かった性格が明るくなったと言います。目標は就職、という廣田さん。この仕事は自分の力になると話します。

員と利用者だけで行うのではない仕事を、探したい。そう考えていた時にメール便配達のことを知ります。職員からは不安の声が上がりましたが、「社会に出ることを考えている人たちにとって、地域とつながっていないと、ここは社会とは言えないんじゃないかと思いました」と西村

施設長。

そしてスタートしたメール便配達。しかし、思わぬトラブルの連続でした。仕事のことはもちろんですが、あいさつや身だしなみ、またトイレが近いことなど、思いがけないさまざまな問題が浮き彫りになったのです。「施設の中にいる時は気に

ならなかったことが、外に出るとこんなにも問題になるんだと、痛感しました」(西村施設長)

しかし、メール便配達を続けていくうちに、そんな彼らに変化が起きてくるのです。トイレの近かった人が、配達前は水を飲むのを控えるようになったり、職員が何度注意しても寝坊していた人が、早く起きられるようになったり。「仕事をまかせると、自信につながるんです。仕事に対する責任感が、自尊心を生みました。どんどん変わっていったんです」西村施設長も、その姿に驚いたそうです。

失敗の中から、工夫を見つけてきた。

西村施設長は、自主性を重んじています。職員がいない時、自分たちだけでどうすればいいのか。そのために、万全のチェック項目をつくりました。「ミスしても言えない人がいます。それでは改善できません。ミスがダメなのではなく、しないようにするにはどうしたらいいかが大事なんですよ、と話しています」配達前に、儀式的チェック項目を、3回も読み上げてから出かける人もいるそうです。

職員の稲垣伸弥さんも話します。「失敗の中から、自分たちなりの工夫を見つけていきました。それがあって、彼らだけで配達ができるようになったんです」
今、彼らは、黒ネコのマークをつ



けて、地域とつながっています。この仕事にチャレンジした価値は大きいと、西村施設長は話します。

真剣な取り組み方に感心。

ヤマト運輸の愛知主管支店 メール便課の久米裕一課長は、彼らの働きぶりを見て「やらされている感じがありません。自分から熱意を持って、仕事をしてくれています。真剣な取り組み方に感心しました」さまざまな工夫なども、参考になりましたと話します。名古屋守山支店 小川茂幸支店長は、責任感あふれる彼らの仕事に感謝します。「ノートに書かれた事細かな報告書などを見ると、本当に頭が下がります」

スタート時に「のぞみを担当していたのは、名古屋中支店 岩永健二支店長。『最初は、苦労されていたと思いますが、実は他のところより少なかったんですよ。わからないことを、わからないとはっきり言ってもらえた。そのまっすぐな姿勢が、今の成功につながっていると思います』彼



「のぞみ」西村小百合施設長 メール便配達に従事する人は、ステップアップモデルとして、「のぞみ」の中で目標の存在になっているんですよ、と話してくれました。「企業の看板を背負って、自信をつけながら働いている。それが、他の人のあこがれになっているんですよ」まかせられている、という気持ちからくる自信は大きい、と言います。

前右列から／「のぞみ」西村小百合施設長、後藤恵美さん、稲山邦彦さん、ヤマト福祉財団 中部支部 後藤淳浩事務長 後列右から／ヤマト運輸 名古屋守山支店 小川茂幸支店長、愛知主管支店 メール便課 久米裕一課長、名古屋中支店 岩永健二支店長 職員の稲垣伸弥さん、大林荒太さん、佐々木泰雄さん、廣田吉伸さん、中村公治さん、藤原剛さん

らの成長ぶりを喜びます。

「のぞみ」では、毎日の確認作業の他にも、毎月フォローアップ講座を開いています。その第一回目に決まったことは、ペアの人がポストにメール便を入れにくそうにしていたら、「入れづらくそうですね」と声をかけてあげること。

わからないこと、できないことが、今日も彼らを成長させています。

10月20日にはあさあけの園が、ふれあいランド岩手で95名の来場者を迎え報告会を開催。岩手県内でメール便を配達する他4施設との共同開催となりました。

以前、東北地区全体で報告会を開催したことがあり、その報告会に参加したあさあけの園のクロネコメ

イトさんが「また参加したい」と話したことがきっかけで、報告会に応募したそうです。

当日は10名のクロネコメイトさんから実践報告が、また配達地域に住む方からもお話がありました。

交流会では、参加施設が提供した商品の抽選会や、歌の披露などがあり、会場が盛りあがりました。



報告会に参加した施設 あさあけの園/盛岡杉生園/さくら製作所/あけほの/りんりん舎

私を待っていてくれる人がいます。

本人による特別報告会

現在、318カ所の施設で約1400名のクロネコメイトさんがメール便配達に従事しています。そのなかから地元での「クロネコメール便配達本人による特別報告会」の開催を希望する施設を公募し、13施設が4会場で報告会を開催しました。

飛翔クラブは、10月27日、69名の来場者を迎え報告会を開催しました。

今年5月からクロネコメール便配達を始め、徐々に配達冊数を増やし、今では月に約3000冊を配達しています。本人報告では4名のクロネコメイトさんが、メール便配達

の仕事にやりがいを感じ、社会参加をしているという責任感や、自信をもつことができるようになったことなどを報告しました。



11月14日には、しらさぎ作業所が、ラヴィーナ姫路で報告会を開催。当日は地域の方や職員、ご家族など84名もの方々が集まりました。

最初に日々のクロネコメール便配達の様子をスライドで説明。4名のクロネコメイトさんが、メール便の配達を通して感じていることなど、さまざまな思いを来場者に伝えました。



国連障害者権利委員会委員長 ロン・マッカラム氏を迎えて JDF全国フォーラムを開催

2012年12月6日、「障害者権利条約と制度改革～差別禁止法をはじめとする国内法制と批准への展望～」と題し、日本障害者フォーラム（JDF）全国フォーラムが東京・霞ヶ関の灘尾ホールで開催されました。国連障害者権利委員会委員長ロン・マッカラム氏は、基調講演で権利条約の目的や各国での批准状況、その実施状況を監視する委員会などについて説明され、参加者の理解を求めました。その後に行われたシンポジウムでは「差別の本質をもっとも感じている当事者がこの条約を理解し、声をあげなければならない」「差別禁止法を原点にして、



障がい者一人ひとりの問題解決につながる方法を考えたい」などの意見が交わされました。



この活動にヤマト福祉財団は助成をしています。

おこしやすビジネス アビリティ プレゼンテーション 未来のしごとおこしフェスタが開催されました。

12月7日 滋賀県大津市の大津プリンスホテルにおいて、滋賀県社会事業振興センター主催により『おこしやすビジネス アビリティ プレゼンテーション2012』が開催されました。滋賀県内外の作業所がブースを出展。パームクーヘンやチーズケーキなど、極めて完成度の高い商品も展示、移動商店街のデモも行われ、障がい者のしごとおこしをアピールしました。有富理事長も、ひびき福祉会の亀井勝氏とともにステージ



に登壇し、経済的な自立力を備えた新しい福祉について講演しました。

公益財団法人住吉偕成会 すみよし生活支援センター

すみよし生活支援センターは、「山梨でメール便の配達や仕分けをがんばっている人達の姿を披露したい」とクロネコメール便配達報告会に応募。

10月31日、山梨県内でクロネコメール便の配達や仕分けを行う6施設が甲府市総合市民会館で共同での報告会を開催しました。

当日は日頃のメール便の活動風景をムービーで上映した他、11名のクロネコメイトさんが実践を報告。来場者はその取り組みに熱心に耳を傾けました。



報告会に参加した施設 すみよし生活支援センター／就労支援事業所かしのみ／むつみの家／松の実作業所／就労支援センターいちごいちえ／すみよし作業センター



クロード・モネ 《ヴェネチアのゴンドラ》
 1908年/油彩・カンヴァス/81×65cm/ジヨルジュ・クレマンソーの遺贈、1930年



アルフレッド・シスレー
 《モレ=シュール=ロワンの運河沿い》
 1892年/油彩・カンヴァス/60×73cm/
 国の寄託、1933年



Information of the Art

フランスの宝石箱 ナント美術館展

ジャン=レオン・ジェローム
 《羊の角を突けた女性の頭部》
 1853年/油彩・カンヴァス/47.5cm(直径)/
 ナントのサロンで購入、1854年



近代絵画
 100年の息吹
 フランスはブルターニュ。ロワール川河畔に、古より大西洋への玄関口として栄えた古都ナント。1801年に創設され、15あるフランス地方美術館の中でも屈指の伝統を誇るのがナント美術館です。13世紀のイタリア絵画から現代にいたる充実のヨーロッパ絵画コレクションで知られます。

本展は、19世紀から20世紀にわたる絵画の一大潮流を俯瞰するのにかかせない名作約60点が並び、またとない機会です。印象派の誕生からモダンアートまで。印象派の誕生からモダンアートまで。印象派の誕生からモダンアートまで。

開催期間▶2013年1月25日(金)~3月10日(日)

休館日▶月曜日(祝日の場合はその翌日)

※ただし、2月11日(月)は開館

開催場所▶佐賀県立美術館

●佐賀駅から
 佐賀駅バスセンターから市営バス:1番のりば「佐賀空港」
 あるいは3番のりば「平松循環」・「広江・和崎」で⇒「博物館前」下車徒歩1分

●佐賀空港から
 佐賀空港から市営バス⇒「博物館前」下車徒歩1分

●マイカーで⇒佐賀城公園奥に駐車場有り

開館時間▶9:30~18:00 ※入館は閉館の30分前まで

観覧料(税込み)▶

	一般	高校生以下
当日	1,200円	無料

障がい者の方および付添人1名様は無料。
 入館の際に障害者手帳などをご提示ください

前売り料金/1000円

問い合わせ先▶

STSサガテレビ 事業企画部 0952-25-9083 (9:30~17:30平日のみ)
 佐賀県立美術館 0952-24-3947

主催▶STSサガテレビ、佐賀県、西日本新聞社

共催▶TNCテレビ西日本 特別協賛▶株式会社ミズ溝上薬局・漢方みず堂

後援▶佐賀県教育委員会、佐賀商工会議所、社会福祉法人佐賀県社会福祉協議会、佐賀日仏協会、佐賀市、アンスティチュ・フランセ九州、在日フランス大使館

協力▶AIRFRANCE 企画協力▶ホワイトインターナショナル

巡回情報▶2013年6月4日(火)~7月7日(日) 山口 山口県立美術館

2013年7月19日(金)~9月1日(日) 鹿児島 鹿児島市立美術館

公益財団法人ヤマト福祉財団全国支部連絡先(ヤマト運輸(株)内)

支部	事務長	連絡先
北海道支部	千葉栄一	TEL. 011-891-5040
東北支部	小原 守	TEL. 022-374-8065
東京支部	徳武範夫	TEL. 03-5564-3702
関東支部	愛澤啓二	TEL. 045-508-6106
関東支部東地区	平井 忠	TEL. 043-259-7364
北信越支部	酒井 貢	TEL. 025-231-9513
中部支部	後藤淳浩	TEL. 052-725-3633
関西支部	石田久雄	TEL. 06-6682-8570
中国支部	竹下憲雄	TEL. 082-849-1451
四国支部	紅露 隆	TEL. 0877-46-7875
九州支部	北川秀隆	TEL. 092-931-3310
沖縄支部	佐渡山一郎	TEL. 098-840-3605

本誌の無断転載・転用を禁じます。© 公益財団法人ヤマト福祉財団

ご協力ありがとうございました。
 スワンのクリスマスケーキ



2012年12月、スワンのクリスマスケーキは、昨年より大幅に販売個数を伸ばし、98,494個となりました。全国のヤマト運輸、ヤマトグループのみならず、ご協力ありがとうございました。



読みやすさを追求した書体

